

『物類品隲』の知：出来事を編集した本草学書

川崎, 瑛子 / KAWASAKI, Eiko

(出版者 / Publisher)

法政大学国際日本学研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

INTERNATIONAL JAPANESE STUDIES / 国際日本学

(巻 / Volume)

11

(開始ページ / Start Page)

275

(終了ページ / End Page)

304

(発行年 / Year)

2014-03-31

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00022475>

『物類品隲』の知～出来事を編集した本草学書～

川 崎 瑛 子

1. はじめに

本草学とは自然のあらゆるものを薬物として認識し記述する学問である。それは中国で誕生し、日本に渡った。そして18世紀の日本では本草学は薬草の学という制限を越えて、自然をあるがままに観察し、記述していく学問へと発展を遂げていくことになる。その発展の中で薬品会と呼ばれる学者同士の会合が始まった。薬品会とは本草家や医師、薬種商人などが手元の薬物や薬材を持ち寄って、その真贋や名称を巡って質疑応答を繰り返しながら情報交換をする会であったとされている¹⁾。

出品者と出品物の明確な記録が目録として残されている最初の薬品会は宝暦7年（1757年）7月に田村藍水によって開催された会である。その後、薬品会は江戸だけではなく、大坂や京都、熊本、尾張、伊勢など全国に渡って行われるようになった。藍水一門による薬品会は宝暦7年から宝暦12年にかけて5回行われた。藍水が会主を務めたのは宝暦7年に行われた1回目と宝暦8年に行われた2回目である。残りの宝暦9年に行われた3回目と宝暦12年に行われた5回目を平賀源内、宝暦10年に行われた4回目は松田長元がそれぞれ会主を務めている。4回目の長元による薬品会の目録は無いが、1回目から3回目の薬品会の出品者と出品物は『会薬譜』として纏められ、東都薬品会と呼ばれる5回目が開催された後には『物類品隲』という解説目録書が出版された。第五回東都薬品会は宝暦12年（1762年）の開催であり、『物類品隲』は宝暦13年（1763年）に出版されている。

薬品会の解説目録書には『物類品隲』に先駆けて、宝暦10年（1760年）に

大坂の医師である戸田旭山が出版した『文会録』があり、宝暦11年(1761年)には京都の本草学者である豊田養慶が『楮鞭余録』を出版した。しかしこの二冊の書名はやや文学的で、中身を見なければ本草学に関係する本だとは分かりにくい。一方で『物類品隲』は「物類」を「品隲(品定め)」するという本草学の書物であることがすぐに分かる書名になっている。また『文会録』と『楮鞭余録』はともに出品者ごとに出品物を分類し、解説していた。しかし『物類品隲』は出品物を『本草綱目』の分類法に従って分類し、解説を行っている。この点においても同じ薬品会の解説目録書である『文会録』と『楮鞭余録』とは異なる体裁をとっている。

本稿は『物類品隲』の記述を分析することで、藍水や源内らが薬品会で得た知を如何に編集し、読み手に何を伝えようとしたのかを考察するものである。

2. 薬品会と『物類品隲』

2.1 薬品会の歴史と開催の目的

薬品会は江戸で行われたのちに、戸田旭山が大坂で開催し、京都では豊田養慶が主催するなど全国的な広がりを見せていた。薬品会がブームとなった裏側には輸入品に頼りがちになりつつあった日本の貿易事情と、輸入されてくるモノについて正確な知識を持つ学者が少ないという現実があった。

宝暦12年(1762年)に第五回薬品会を開催するにあたり、源内らは出品を募る引札(広告)を全国に回している。その引札には「本邦産スル所ヲ藥物ヲ備悉スルニ以テ足ラズ縦令ヒ之有リトイエドモ用ニ中ズト。徒ニ耳ヲ貴テ目ヲ賤ンス。愼焉トシテ意ヲ加ヘズシテ常ニ給ヲ海舶ノ齎載スル所ノ其題スル所ニ從竝。蓄テ會テ其ノ真偽ヲ辨ズ嗟乎其レ人ヲ傷ザル者ノハ幸ナリ。若シ夫レ洋海颶に遇ヒ商舶期ヲ失シテ至ズ。前日ノ藏ムル又已ニ盡レ則其ノ疾治スルヤ棋類スル者ヲ投シテ。而シテ其ノ奇中ヲ庶幾カウ其レ亦思ザルノ甚ナリ。甚ヒカナ。本草学ノ講セザリシアルハベカラズ。始メハ人ヲ欺キ終ワリ以テ己ヲ欺クソレ薬用之品。無ンハ則已ニ。有リテ而シテ之ヲ知ラズ。人ヲ欺キ己ヲ欺クに至ル。是ヲ何ト謂ンヤ」²⁾ という記述がある。この時代は国産の薬物には有用なものが少なく、輸入品に頼らざるをえなければ、重要で確実な知識

を得る機会も少ないのが現状だったようだ。そして本邦の薬物に目も向けなければ輸入品の真偽を吟味し、正確な知識を欲しようとしないう学者たちが多かったことがうかがえる。

源内らは外来品はおろか日本産の薬物の実体を把握することすらままならず、耳学問だけで済まされがちであった状況を改善しようとしている。これが日本全国に出品を募る引き札を回すほど大規模な薬品会を開催しようとした動機であり、目的の一つである。

第五回東都薬品会以前に大坂で開催された戸田旭山の薬品会について纏めた『文會録』の序文でも「海内ノ草木ヲ以テ睥睨シ」という言葉がある。日本のモノを眺めたいという欲求は当時の学者らの間で共有される願望だったことが分かる。古典の記述という概念に基づく知ではなく、実際の「モノ」の実体に接しながらモノの事実を理解し、従来の知識の真偽を判断する場として薬品会は開催されていた。

「徒ニ耳ヲ貴テ目ヲ賤ンス」とする源内の言葉を借りるならば、薬品会が開催された時期の学者たちは、「耳」から入る言葉によって学ばれていた本草学を、「目」に見える実物から知を得ていく学問へと変えていこうとしている。

薬品会はただ薬物となるモノを蒐集し、鑑賞するだけで満足するような受動的な試みでは無く、好事家を喜ばず展覧会でもなかった。学者らが薬品会に求めるのは実際の「モノ」を目の前にし、時にはそれに触れながら行われる学者同士の活発な議論である。薬品会とはモノの実際を知り、モノを標識にして現れる自然や国などの世界を見つめながら探求する場だ。それは「展覧会」や「博覧会」というような牧歌的な空間ではなく、自らの知識や研究成果を公開し、その妥当性を審議討論する現代の学会に近い。薬品会は目視の力が問われる眼目の空間であり、古典の言葉という概念では無く実物によって正確な知を見つめることが参加者らに要求される場である。

源内も引札の序文の後に「序にしるすがことく此會の主意は只今まで漢渡にて我国になき品も深山幽谷尋求る時は又なきにしもあらずしかはあれど道遠き国々を一々尋ねんとするの煩しく又ことことは至るへきにもあらされは其国々の人にたよりて産する所のものを得て是を考る時は諸本草並にどどにゆすころいとほつくとといへる阿蘭陀の本草等に出るところ大体は外国よ

り渡らずとも日本産物にて事足りなん然る時は内治外療の器少なからずと思ひ立し」と日本の深山幽谷から漢や阿蘭陀からの輸入品を見つけ出すことで、更なる日本の自給率の向上を目指すことが薬品会の主意であると改めて述べている。

また引札は「無名の異物にても思召寄に御出し」とも記述する。たとえ無名のものであっても出品してくれと薬品会の会主である源内は積極的にモノを募集している。しかも前回の薬品会で出品されたものであっても産地が異なるのであれば出品を認めると、実際のところ源内は珍品にはこだわっていない。そして「山澤の名方言等又は深山まれにある品所在多く産する譚などくわしく御書しるし」と、方言や産物の由縁なども詳細に記して欲しいと言う。源内らはモノの希少性やその医療価値のみを求めているのではなく、日本の自給率の向上という実用的な思惑のみで薬品会を開催しようとしているのではない。方言や由縁などを重視するということはモノを自然から切り離された無機質な「object」として扱うのではなく、そのモノが育まれた風土やそこで暮らす人間達の姿と共にモノの知を考究しようとする為である。

源内らが引札を回した末に開催された第五回東都薬品会は1300種の出品物を集め、旭山や養慶らの薬品会はもちろん、藍水一門が行った過去四回に渡る薬品会での総数700数種を一度で超えており、盛況のうちに終わったと考えられる。源内らの引札は日本の実情を反映させたいうで本草学にかかわる人々の心を奮起させるものであり、薬品会は知への好奇心を確実に高める会であったことが分かる。

2.2『物類品隣』の構成

『物類品隣』³⁾は江戸で5回に渡って開催された薬品会に出品された総計2000余種の中から重要なモノや珍しいモノを厳選し、それに解説をつけたものである。タイトルページには「鳩溪平賀先生著」とあるが、巻一の冒頭には「鳩溪平賀国倫編輯」とある。そして田村善之、中川鱗、青山茂恂の名が続く（なお田村は讃岐、中川は江戸、青山は信濃出身である）。そして「藍水田村先生鑑定」とあることから、『物類品隣』は源内個人の著作というよりも藍水の鑑定を源内、田村、中川、青山の四人で編集した本であるとした方が

事実に近いと思われる。しかしタイトルページには「鳩溪平賀先生著」とあり、解説の中には源内個人の経験に基づいた記述があることから源内が中心人物であった事がうかがえる。しかしたとえ源内が中心となっても、藍水の鑑定を四人で編集していることから、『物類品隲』は本草学と薬品会に関わった多くの人々のまなざしを複数の視点から読み解くことのできる本である。

『物類品隲』では『本草綱目』の分類方法を踏襲し、全2000余種の中から厳選された360種を巻之一に水部・土部・金部・玉部、巻之二に石部、巻之三に草部、巻之四に穀部・菜部・果部・木部・蟲部・鱗部・介部・獸部の順番で分類し解説している。そして巻之五は図絵であり巻之六は付録として人参培養法、甘藷培養并製造法、朝鮮種人参試効説が解説されている。よって『物類品隲』は薬品会の目録解説書以外の価値も備えた本である。

また『本草綱目』の分類方法を参考にしたことは『物類品隲』の凡例で述べられているのだが、杉本つとむは『本草綱目』よりは林羅山の『新刊多識編』の影響を受けていると考察している⁴⁾。そして『物類品隲』には非常に多くの板書があり、出版元の相違も著しい。『物類品隲』は当時の出版事情を探る史料としても価値があり、現代でもその視点からの研究が行われている⁵⁾。

このような『物類品隲』の凡例には「品物重複スル者ノ及論富核者未タ者ノ及常種凡類世人能ク識所ノ者者皆畧載ズ」とあり、重複したものや未だ実体が明確でないもの、そして世人がよく知っているモノは省略されていることが分かる。よって『物類品隲』には日本国内のモノ以外にも蛮種夷種とヨーロッパから輸入された「珍しいモノ」の解説が非常に多い。また藍水が寄稿した序文では「広諸四方、以為諸州製作之助也、冀徧有益人民乎云尔」と『物類品隲』が広範に知られ、製作の助けになるような有益な書物となることを願っており、また「珍しいモノ」の他に人参の栽培法などの知識を載せた巻もあることから『物類品隲』は薬品会の解説書以上の価値を目指して編集されていることが分かる。

2.3『物類品隲』から垣間見る薬品会の様子

『物類品隲』の冒頭には藍水と藍水の門下生である後藤梨春の序文が寄稿されている。梨春は「遼宦啣復翔西洋」という書き出しから始めている。これ

は雀（つる）が蓂（人参）を啜えて西洋へと羽ばたくという意味を持つ。この一文からは鶴や人参のような東洋的なモノでもって西洋へ挑もうとする挑戦的な意気込みが感じられる。

また梨春は「毒薬之難辨者真偽也明辨真偽而後漸生可得而論也已而世難乎其人焉」と毒薬の真偽は弁じがたく、それらを明らかにできてこそ生を得ることができ、それらの主体が「人」であるとする。この「人」への視線は藍水の寄稿した序文でも伺える。藍水は「辨薬草之真贋而得其正矣雖然随欲掌握衆薬於此也則独力之所能盡也其以一人力得之僅」と独力では薬草の真贋を見極め、衆薬を掌握することはままならないとする。その為に四方の同志らの力を借り、諸州の奇物や蛮国の珍品異物を藍水のところに送ってもらい薬品会を開催することを思い立ったと記述する。薬品会は「モノ」を中心に「人」と交流する場でもあった。

その為、『物類品隲』には珍しいモノの他に非常に多くの人物が登場する。それは藍水門下だけでなく後の蘭学者や長崎通詞、そして無名の地方の人物にまで至る。主な人物を挙げると、宝暦2年（1752年）に既に『本草綱目補物品目録』を編輯し、後に『紅毛談』を著す町医の後藤梨春、『解体新書』を発行する杉田玄白と中川淳庵、現役の官医でもある岡田養仙、藤本立泉、岡了伯、宮村永隆、橘隆庵、山田富水、長崎通詞の植林十右衛門、吉雄幸左右衛門、伊豆の農民の鎮惣七である。

また引用文献も中国古典の『本草綱目』を筆頭に『天工開物』のような技術書や『医宗粹言』『物理小識』などの医学書や科学書、そして『和名抄』『古今六帖』『大和本草』などの日本の古典に至るまで『物類品隲』には登場し、源内らが参照していることが分かる。モノの呼称のルーツを古典や聞き取り調査などによって探索する名物学も『物類品隲』では行われている。

たとえば沙参では「和名ツリガネニンジン、山城、山科方言ビシヤビシヤ。但馬方言キキヤウモドキ。筑紫方言シテンバ。南部方言ヤマダイコン」とあり非常に多くの方言に注目していたことが分かる。『物類品隲』で源内らが取り扱っている方言は江戸方言、日光方言、伊豆方言、西国方言、讃岐方言など多岐に渡り「俗、和俗、方俗、一名」など俗称や別名も多く考察している。そこにくわえて紅毛語や蛮語、琉球語など中国からヨーロッパにも渡る。また

参照する文献は本草学に関わるものだけではなく金の部分では「和名コガネ、往古ハ本邦ニ金ノアルコトヲ知ズ」としたうえで大伴家持の「スメロキノ御代サカエントアヅマナル陸奥山ニコガネ花サク」と『万葉集』の和歌を引用する。名物学の側面も外国のモノの登場と共にグローバルな展開を見せ始めているが、一方で東都方言、江戸方言が多く収録されている。これは藍水や源内といった中心人物たちの研究生活の拠点が江戸であったことが影響しているのだろう。しかしこれまでは中国や日本の古典に注がれがちであった視線を「江戸語」「江戸方言」といった「当代」へと向け始めているのだ。

『物類品隲』では嘗ては中国と過去の日本の知でしかなかったものが、江戸に生きる人々の知へと更新されていく。それは日本に生きる人々の生活ともあわせて「現代」の「実情」を反映させるものでもあった。薬品会ではそれまでの学者達の経験や知見が開放されることによって嘗ての知が徐々に更新され、現代のものへと変わっていく動的な現象が起こる場であり、『物類品隲』はその様子を、当代を生きる人々の声と共に伝えるものとなる。

名物学のほかに「薬品」会の名に沿った medical に関する話題も提供される。蝦夷産のエブリコの解説には蝦夷人は病の時にこのエブリコを用いるとされている。そしてその次にはルザラシが解説される。このルザラシは瘡や蟲積、食傷、攪乱、胸痛などを治し、毒を解するそうだ。また「鯨ニテオロシテ二分許白湯ニテ用、又熱腫ニハ水ニテ解キ傳テヨシ」と使い方まで解説されている。薬品会には蛮国から蝦夷に至るまで非常に多くの国から採れたモノが集う。それらの名称や経験をめぐって横文字が飛び交う薬品会は、江戸にしながらグローバルで新たな体験ができる場であると同時に、薬材としてモノの使用方法を確かめ、病への影響を明確にしていくという旧来の本草学を追求する場ともなる。

知識や知恵も、中国や日本の古典を下敷きとしながらそこに日本で身に着けた自身の実際の経験を反映させる一方で、オランダ語やオランダ人からの伝聞という新規の情報源と可能性が登場する。薬品会とはモノもそして知識を得る手段も新規と既存が交錯する場であった。次節からはそのような薬品会を経験した人々が、どのような知を『物類品隲』によって編集しようとしたかを考察していく。

3. 『物類品隲』に記述された薬品会の経験と知

3.1 薔薇露から繋がるヨーロッパの知

『物類品隲』巻一の冒頭に登場するのは水部であり、解説されるモノは薔薇露である。この水部には薔薇露しか載っておらず、水部は薔薇露の為だけに設けられた分類であり、また水部の為に薔薇露が選抜されたと言ってもいい。『本草綱目』のように「雨水」や「露水」でもなく、また『大和本草』のように「熱湯」「浴湯」でもない。薔薇露という一読しただけでは何かが分からない外国のモノから『物類品隲』の解説は始まり、薬品会の出品物は登場する。

薔薇露とは和名バラノツユであり、紅毛語はローズワートルである。そして紅毛人は刺刺があるものをローズといい、ワートルは水であると解説は進む。そして「此ノ物ランビキヲ以テ薔薇花ヲ蒸シテ取タル水ナリ」とあり、薔薇露とは人力によって薔薇から蒸留される香水であることが分かる。完全な天然物ではなく、天然由来ではあるが人工のモノが薬品会に出品されている。

そして解説は『本草綱目』の著者である李時珍も牆藂の項目で番国に薔薇露があることを指摘しているがそれは花上の露水であるとする。『物類品隲』では李時珍も薔薇露の実体を知らなかったと書いており、古典の知識から薔薇露の正体を解明する事はできない。つまり薔薇露の精製法を知っている人物が薬品会に参加していた、もしくは参加者の身近な関係の中にいたことになる。

『物類品隲』の解説によると紅毛人は常に長崎に薔薇露を持ってきていたらしい。「近世本邦ノ人亦其ノ伝ヲ得テ是ヲ製ス」とあり、江戸から見て近世（現代から見れば中世）の人々は既に長崎で薔薇露の製法をオランダ人から伝授されていた。非常にグローバルな経験が日本の長崎では行われており、その知識は薬品会の時期まで伝えられ続けていたことが分かる。また精製する時には「サルアルモニヤアカ」があれば数十年は腐らないと非常に実用的な面にまで『物類品隲』の解説は切り込んでいる。そして薔薇だけではなく梅の露からも香水はできると自生の薔薇のない日本での代替案まで引き出すに至る。解説は実際の精製法にまで及び、そこには「フラスコ」「キヨルコ」などのオランダ語が飛び出してくる。

「薔薇露」は東都薬品会の出品物の中でもかなり珍しいモノであり、人々の

興味をかき立てた出品物だったのだろう。そして薔薇露のローズワートルといったオランダ語の由来を答えることができ、『本草綱目』にも載っていない製法や保存方法に至るまでの知識を備えた人物が薬品会に出席しているのである。それは一人ではなく複数の人間の知識を繋ぎ合わせた結論かもしれないが、当時の日本で長崎を中心に西洋の知識が言葉だけでなくモノと共に広く伝えられていく様子が垣間見える。

そして薔薇露の項目の最後には「サルアルモニヤアカ、キヨルコノ事各条ニ詳ナリ」と書かれているのである。つまりサルアルモニヤアカとキヨルコも東都薬品会には出品されている。そしてその項目へ『物類品隲』は誘導しようとしているのだ。外国の慣れない言葉で読み手の興味を煽り、ページを巧みにめくらせようとする源内らの思惑にのせられて、今度は「サルアルモニヤアカ」と「キヨルコ」の解説を覗いてみる。

サルアルモニヤアカは礶砂（塩化アンモニウム）であり、石部に収載されている。『物類品隲』の礶砂の項目ではオランダ語ではサルアルモニヤアカというと解説したうえで、その形は鹵鹹に似ているとする。鹵も鹹も塩を意味する言葉である。これが薔薇露の香気を保存する役割を果たすそうだ。そして礶砂そのものの製造法まで解説は及ぶ。それは焰消などの薬でもって製造されるらしく、製造法も伝わっているとされている。

ここで「紅毛通事榎林十右衛門」と固有名詞が登場する。そして十右衛門曰と、藍水門下と十右衛門との会話が『物類品隲』の中で再現される。十右衛門によればサルアルモニヤアカは二種類あるらしく、一つはいわゆる蜜国に自然に生じ、もう一種は自然に生えるものは少ないそうだ。その為、このもう一種類を得るためにオランダ人は他薬から升鍊する。その気味効用は自然に生じるものと同一だそうだ。

詳しい製造法は書かれていないが、オランダ人がサルアルモニヤアカに抱える事情が明らかになる。これだけの情報をオランダ人から引き出す十右衛門の語学力の高さと、オランダ人と築いている円満な関係の一端が『物類品隲』の記述からうかがえる。

そして自然には手に入らない種を得る為に、オランダ人は焰消などからサルアルモニヤアカを升鍊することにまで十右衛門の知識は及んだことを示す解

説が続く。海外のモノ事情やそれに伴う技術など、人間とモノの関係について『物類品隣』は記述する。これは当時、通詞を介した西洋のモノと知識の受け渡しがあったことを感じさせる解説であり、本草学者らにとって非常に近い場所に「西洋」は人間やモノという実体を伴って存在していたことが分かる。

次に「キヨルコ」である。これは本部に収載されており、コルクのことである。これは「紅毛語壘ノ口ヲボロツプト云。故ニ和人間誤テ此ノ物ヲホロツフト称スルハ誤ナリ」と解説されている。紅毛人は壘（ビン）の蓋をボロツプと言ひ、それを聞く環境にいる和人（日本人）がいた。そしてホロツフ（壘の蓋）＝キヨルコ（コルク）と取り違える日本人もいたようである。江戸時代はオランダ語と接する機会が多く、オランダ人たちの生活の中に現れる言葉と実際のモノを一致させようとする努力をしている人々が一定数いたことが分かる。そのオランダに対する知識の真偽を質すことにも薬品会は一役買っており、『物類品隣』はその知を記述する。

この薔薇露から繋がっていく一連の解説から分かるのは、薬品会とは限られた人間達だけに共有されていた知識が「開放」されていく場だということだ。それまでは長崎でしか得る事のできなかったモノとその知識が、薬品会の会場で大勢の参加者に伝えられていくのである。また日本のローカルな場所の情報や、外国の人間達が培ってきた製造法や採取法など、これまでは特定の人間しか知らなかった経験や知恵も会場では開放され、多くの人々に共有されていくのである。それは実際のモノを目の前にした視覚による経験を通じて伝搬していくものであった。

また蜜産の出品物として雲母がある。蜜産の雲母のほかにも参河吉良村、河内道明寺山中産、讃岐良野産が出品されており、それぞれ上品、中品、下品であると品評が下されている。雲母は和名がキララであり、紅毛語ではアラビヤガラアストという。『物類品隣』には「アラビヤハ国ノ名ナリ。ガラアスハ硝子ヲ云」と名の由来が解説されている。蜜国ではないアラビヤという新たな国が薬品会には登場した。莞菁も紅毛語ではスパンスフリイゲといい、スパンスは国の名であると解説されている。薬品会ではこうやって新たな「国」を、モノと言葉を通じて発見していた。薬品会は「発見」の場でもあった。

粉霜も蜜産の出品物である。オランダ語ではメリクリヤルドーリスという。

これは中川淳庵の知識である。そしてこれまでと同じく「メリクリヤルハ紅毛人水銀ヲ云、ドーリスハ殺スト云詞ナリ。水銀殺トハ水銀ヲ焼製スルヲ云ナリ」とオランダ語の構成について分析する。この粉霜の他にもカナノラルでは紅毛語はブルーステインといい、ブルートは血でステインは石であるとし、ロートアールドは赤色をロートと言い、アールドが土であると解説される。粉霜の解説の最後に「蛮人ノ語脉此ノ類多シ」とあることから幾つもの紅毛語と接する中で、言語を構成する一定のパターンを源内らは把握するに至っている。淳庵は後に玄白と紅毛語を翻訳し『解体新書』を出版するに至る人物であり、その語学力は言葉の構成を判別できるレベルに達していた。その知識は藍水一門の間でも一目置かれるものであり、源内らにもその知識は共有されていたことが分かる。

このように『物類品隣』には「紅毛産」「紅毛語」「蛮種」「蛮国」といったヨーロッパを意味する言葉が頻出し、また「紅毛人持来ル」というようなオランダ人との交流を感じさせる表現も多い。貿易という公務の一方で薔薇露のような私的な品の個人的な譲渡も行われており、それが本草学者へと伝わり薬品会へ出品される。薬品会とはこれまでの経験から得られた知識とモノの伝搬の成果が結実する場であり、その様子を『物類品隣』は編集している。

3.2 金剛石から広がる東西の知

金剛石は藍水の出品物であり、蛮産である。これまでの解説のパターンならば蛮語での呼び名が書かれるはずである。しかし源内らは、まず梵語での呼び方である跋折羅や『西域記』に記載されている伐羅闍などの呼び名を中国古典から見つけ出して解説している。その後、『抱朴子』『玄中記』『(晋の武帝の時代の)起居注』『維摩経』などの古典の解説を参考にすることで、オランダ人が持ってきたギヤマンこそ、これまで跋折羅や伐羅闍と呼ばれてきた金剛石と同一のモノであると最終的に結論づけている。古典の解説とモノの実体を照らし合わせながらの同定作業が薬品会では行われており、『物類品隣』は未知が既知へと変わっていく過程を詳細に綴っている。

参考にした文献として挙げられている古典は、本草学書でもなければ技術書でもなく医学書でもない。『抱朴子』は神仙や養生などの観点から道教の実

実践理念を説くものであり、『玄中記』は中国の怪異に関する話題が豊富な博物書だ。『起居注』は晋の武帝の時代に関する歴史書であり『維摩経』にいたっては大乘仏教の經典である。

薬品会に関わった人々の認識の媒体は限りなく現実的で実践に裏打ちされた薬学や医学だけではなく、歴史や宗教にまで及ぶ幅広いものであったことがうかがえる。彼らの知識の源泉は実用に限られた本草学や医学だけではなく、1000年以上前から伝わり続けた宗教理念と歴史意識が構成する世界観にまで及んでいた。それらの本から参考にした解説とは形状や産地だけではなく、人が鉄椎を撃っても金剛を傷つけることはできなかったが羊角を使えば砕けたという過去の経験や、晋の武帝に金剛宝として献上されたことがあるなど、人間と金剛石の権力まで交えた関係にまで及んでいる。

『物類品隲』は多くの分野の古典を幾つも参照することで視点の座標を固定することなく、出品物という実物を通じて人とモノの歴史を実感させる。また薬品会に出品された実際のモノは古典の真偽を判定するだけではなく、これまで古典の中でしか知らなかったモノに現実感を与える役割も果たしていることが『物類品隲』からは分かる。梨春が序文で東洋のモノでもって西洋へと切り込もうとしていたが、まさに今回、東洋の古典からの知識という概念でもって西洋からの出品物を解明したのである。「金剛石」という概念を実際の「金剛石（ギヤマン）」によって理解し、実物の「金剛石（ギヤマン）」は、それまで古典の言葉の上でしか知らなかった「金剛石」という概念を実体化させた。薬品会の中で東洋と西洋が出会い、概念と実体は互いに連動することで新たな知へと昇華されていく。概念が実体化していく様子が『物類品隲』には綴られ、また西洋と東洋という巨大な空間に対する学者たちのまなざしが文中からは溢れ出す。

しかし源内らはただ古典の解説とモノを一致させて喜ぶだけではない。西川如見こと西川求林斎（慶安元年〔1648年〕～享保9年〔1724年〕）の説にまで金剛石の解説は及ぶ。如見はギヤマンはデヤマンとも云うし、その色は紫赤が多かったと語る。今回の薬品会で出品された金剛石は白石英に良く似ており白かった為、源内らは如見の時代に長崎に来たギヤマン（金剛石）には赤紫色のものが多かったのだらうと推測している。一つのモノが持つ長い歴史

を古典によって俯瞰した末に、現代の貿易品の変遷に解説は至る。『物類品鑑』はモノを中心に広がる歴史の渦も編集し、また日本を俯瞰しようとしているのである。

3.3 石髓から見えるマクロとミクロ

モノを認識の媒介にして海外を見つめ、日本を俯瞰している様子が窺える解説は金剛石の他にも食塩がある。印塩は獣等の形を作ったものをいうなど塩の製造法もいくつか源内らは知っているようだが「日本ハ四方海ニ近キ国ユエ製スルモノ希ナリ」とする。そして「紅毛人持来モノハ種類多」らしい。それを裏付けるように食塩の項目には崖塩と自然白塩が分類され、戎塩の項目には青塩と赤塩が分類される。

そして通詞の吉雄幸左右衛門が出品した光明塩がある。これらが「紅毛人持来ル」蜜産の塩類である。幸左右衛門は十右衛門に続く二人目の通詞だ。薬品会の会場に直接参加したかどうかは分からないが、長崎の通詞も薬品会には関心を持っており、藍水一門と協力関係にあったことが分かる。

崖塩や自然白塩は蜜産のものだけではなく日本産のものも出品されている。崖塩は下野塩谷郡塩湯産のものが出品され、自然白塩は讃岐山田郡瀉本産と讃岐小豆島土ノ庄産のものが出品されている。そして源内らはそれぞれの形状の違いを確認している。二つとも蜜産と異なる点はなかったが、たとえ同じモノであっても産地が異なれば互いを見比べるのである。

同じ名称のモノが出品されているにもかかわらず、産地が異なるために細かい議論が交わされた様子が窺えるのは石髓である。石髓の項目では、まず石髓には二種類あると解説される。その一種類は『仙経』を引用し「石中空処ニ生スルモノ」とするとし、もう一種類は『本草綱目』に書かれた「臨海華蓋山石窟」に生じるものだ。もう一種類は土地の人々が採取して「澄洵シテ泥ノ如丸ニ作」ったものである。そして薬品会に石髓として出品されたのは下野境野産のものと、越前大野郡打浪村産、そして下野阿蘇郡山管村産のものである。下野境野産の出品者は官医の山田氏であり、山田氏曰く土地の人々が石を割り、その石の中にあった水が流れ出してきて固まったものがこの石髓だそう。これは『仙経』に載っていた石髓に一致する。しかし出品された石は白く、

『仙経』に書かれた色は青い。源内らは『本草綱目』では黄色や白の石髓があるとされているため「恐ハ石ノ色に随テ此物モ亦色ヲ異ニスルカ」「然ル時ハ色ハ一ナラザルト見エタリ」と推測している。実際のモノと複数の古典の知識を照合しながら多くの知の可能性を引き出していく。過去の知を下敷きにし、活用しながらも、更にその先に行くのである。それは知の継承でありながら知の進歩を担う行動であり、知の更新活動だといえる。

また越前大野郡打浪村産のものは「郡上候ノ医官沢東宿」の出品であり、出品者曰く深山の溪谷から流れ出してきた水が自然に凝結したものがこの石髓だそうだ。または草木の枝葉などの形にそって凝結する場合もあるらしい。これは石の中から流れ出しきた水由来の石髓ではないため『本草綱目』で解説された石髓と同じものである。そして最後の下野阿蘇郡山管村産の石髓も水中に自然に決するものであるため、『本草綱目』で解説された石髓である。源内らは下野産のものが二種類あるが重複品とするのではなく、各々の産出の経緯などを詳しく調査したうえで「境野ノ産ト出ル所一様ナラズトイヘドモ、皆石髓ナリ」と結論付けている。ここまでは過去の知によるモノの分類であり、知の継承でしかない。

しかしここから「国倫按ズルニ」と薬品会の会主でもあり『物類品隲』の編集者でもある源内の見解が開始されるのである。

源内は鍾乳石・孔公孽・殷孽・石牀・石花・土殷孽・石髓の七種は全て石液であるという。そして金銀を掘るか、もしくは石を穿った場合には中から石液が滲み出し、これが下垂して固まったものが鍾乳石であるとする。これは孔公孽・殷孽・石牀・石花も名は違うが同一物だとしたうえで、土殷孽は石液が土の中で固まったものであるとする。では石髓はなにかというと、石の中に稀に空の部分があり、この中に充満した石液が流れ出し、風日によって石となったものが石髓だそうだ。下野境野産のものはこのパターンの石髓だと源内は解説する。では越前打浪産と下野山管村産のものはどのようなものかということ、深山幽谷で石液が水と共に凝固したパターンの石髓であるそうだ。「今三所出ル所ノ石髓ヲ見ルニ其ノ質殷孽・孔公孽ト全ク同物ナリ」と源内らは三種の石髓をそれぞれ詳しく吟味し、そして出品者の経験と知識を統合することで新たな「石髓」の知を獲得するに至っている。

薬品会に関わった人々は実際のモノと実体験に基づく証言によって、過去の知を発展させ、現代の自分たちの知へと更新していくのである。『物類品隲』はそのような認識と実践の運動による知の活動を記述していく。

更に石髓の解説は「美濃国ニ産スル日ノ糞、月ノ糞ト称スルモノ」へと移っていく。これは玉の中にある乳水が螺旋の中に入り、凝結してできたものであると、別の地域にある石髓の近縁種の話へも至る。もし薬品会がモノの真偽を質し、古典の真実を追求するだけの場ならば源内の見解は必要なく、また別の土地の別のモノの話題が上がることはない。『仙経』や『本草綱目』からの知識を下敷きにしながらも、石髓の形状や発生する原因などを探ることで下野の境野と山管村、そして越前大野郡打浪村という非常にローカルな日本の土地の自然環境を知り、過去の知を自らの知へと更新していく。そしてその知は更に別の土地とモノの理解へと繋がっていくのである。モノは類似性と差異性の表の中に配列され、その枠をずらすことでモノが嘗て自生していた環境の差を見出していく。モノは環境を読解するテキストともなっている。

薬品会の主催者や参加者らが見つめ、見出そうとしていたのは土地の環境がモノに与える影響という自然のメカニズムであり、求めていたのは一つの知識と見識が新たな経験と知見を呼び起こしていく知の派生であり波及であった。一つの結果が幾つもの方向へと伝搬していく知の綱目構造が薬品会を通じて浮かび上がり、モノと自然、そして人間が構築する関係の渦こそ『物類品隲』が記述し、編集しようとしているものである。

蜜産のものまで出品されていた第五回東都薬品会では日本国内のみならず、外国の環境にも視線は注がれている。たとえば胡椒である戎塩では「凡ソ中華ニ産セズシテ、蛮国ヨリ来ル塩ハ皆戎塩ナリ」と解説されている。「日本ハ四方海ニ近キ国ユエ製スルモノ希ナリ」と塩を製造する必要のない日本の環境を理解した上で、中国からは戎塩は採れないなど、モノとそれに関わる知識は日本と外国の違いまで明らかにしていく。その視点は日本が世界地図の中で占める位置と、その座標ゆえの特徴まで見極めるものであり、日本の独自性を世界地図の中で自覚していくに至る。

モノから環境の違いを見出し、モノへの影響を同時に考察するのはこれまで出版された薬品会の目録解説書である『文会録』や『楮鞭余録』でもみられた

視点である。薬品会ではモノは必ず産地の環境とセットとなっていた。その産地とは讃岐山田郡瀧本や讃岐小豆島土ノ庄、越前大野郡打浪村、下野山管村などのように非常にローカルな土地にまで及ぶものである。薬品会に関わる人々の好奇心は日本へと切り込み、目録解説書の中で日本は細分化されようとしていた。

『文会録』や『緒鞭余録』でも漢産や唐種、紅毛産や琉球産といった外国のモノが出品され、日本だけではなく海を越えた先にある「世界 (world)」が抱える人間や自然環境という巨大なものへと学者達の視野は広げられていている。しかし同時に日本の庄や村という非常に小さな「世界 (community)」の内部にある自然や知識にも学者達の視界は開かれていくのである。中国や朝鮮、オランダといった外国からの輸入品と知識は、同時に日本を人とモノの両面から客観視させ、可視化させていく。薬品会とは world としての世界を俯瞰しながら、その世界を眺望するまなざしを更に周縁からみつめるという二重の運動が同時に行われる場所であり経験であった。

世界が巨大化していく中で、日本は更に細分化されていく。『物類品隲』の中で日本はもはや藩の集合体ではなく、一つの国家でありながら、無数のモノと人が自然のメカニズムと異なる環境の中で相互に関係し合う渦の場である。世界へのまなざしは同時に日本を発見し、マクロへと拡大されていく視界はミクロをクローズアップすることにも繋がっていく。このような知の構造とまなざしの姿を『物類品隲』はモノの解説という方法で編集している。

3.4 モノから広がる関係の渦

環境だけではなく、人間の生活にも本草学者のまなざしと『物類品隲』の記述は向かう。玄白が出品した蜜産の篤耨香はオランダ語でテレメンティナというそうだ。これは『本草綱目』では真蠟国で採れる樹の脂であるとされている。土地の人々は夏に火で樹を炙ることで樹液を溢れさせ、それを固めて篤耨香とする。その香は夏に融けだし、冬に結する。このような『本草綱目』の解説を引用することで源内らは篤耨香＝テレメンティナと結論づけている。モノのメカニズムを自然と共に考察し、夏に火を樹で炙って樹液を採取するという民俗にまで考察は及んでいる。日本から採れたモノでも民俗の見解は

数多くみられる。先述した自然白塩の山田郡産の項目には「方言ジオンシホ、又テントウシホト云。亭戸鹵地ニ海水ヲソソギ日ニ晒スコト数次、霜ヲ生ズルヲ待テ括取、海水ヲ以テ淋滲シタルヲ名テタレシホト云。是ヲ池中ニ貯置ハ其底自然ニ凝結シタルモノナリ」と書かれており、山田郡では状態の変化に伴い自然白塩の名称が変わる事と、如何にして海水や池を利用して自然白塩を採取しているかが書かれている。その他にも越後蒲原郡如法寺村産である石油腦では「水上ニ浮ヲ土人カグマト云。草ニ付取テ器中ニ貯ヘ燈油ニ用ウ」とあり、地油は「讃岐阿野群川東村奧林ニ石壁アリ。高数丈地ヲ去ルコト丈余ニシテ、水、石間ヨリ摘出ス。内ニ乳汁ノゴトキモノ流出ス。土人石ノ乳ト号ス。火傷ニ塗テ治スルコト神ノゴトシ」と解説されている。この地油の産地は源内の出身地の讃岐で、出品者は源内の知人である三好喜右衛門だ。そして「奧林ニ石壁アリ」という地域の細部にまで切り込んだ解説であることから、出品者である三好もしくは源内自身が実地調査し、見聞した記述であると思われる。

薬品会の主催者、出品者、そして参加者らは日本のローカルな土地に実際に赴いている。そして調査を重ね、自然とモノの関係を人間の生活と共に記述していった。細分化されつつある日本は無数のモノと人と共に詳細に編集されていくようになる。それは薬品会の現場では外国のモノや知識を見つめるものになりながら、同時に見つめられるものへと変わっていくのである。

蜜産の胆八香では「以上紅毛人カスハル口授ノ効能ナリ」とある。源内らはカスハルという紅毛人から直接、胆八香の使用方法を教えてもらっているのである。胆八香はオランダ語でヲヲリヨヲレイヒということ、そして「悪血ヲ去リ肉ヲアゲ一切乾タルヲ潤シ筋ヲノバシ痛ヲ和ク。之ヲ服シテ痲疾ヲ治ス」こと「紅毛人平常ノ食用トス」ことをパスカルから教えられたようだ。薬として用いながら食糧でもある胆八香の実体が、実際の経験者の言葉によって解説されているのである。薬品会とは書物を介さない実体験による生の知識が伝搬していく「現場」であり、物類品隣は経験者の生の声を伝えるものともなっていく。

次に胆八樹が解説されるのだが、まずは南蛮諸国に生えているという『本草綱目』の解説を引用する。その解説と出品された胆八樹を照合したところ、

「則此ノ実ノ仁ヲ取テ油ニ搾リタルモノヲヲリヨヲレイヒ和俗ノ謂所ポルトガルノ油是ナリ」ということが判明した。胆八樹の実から油を搾ったものが胆八香であり、それがポルトガル油なのである。『本草綱目』の解説を引用しながらもそこから更に一步、知識の幅を源内らは広げるに至る。

この胆八樹は紀伊産であり紀伊の方言ではツグという。湯浅深専寺内に大木があると『物類品隲』では解説されている。また「葉落ル時至テ鮮紅色愛スベキ」と源内の主観が混じっている。「庚辰ノ歳予紀伊ニ遊テ始テ是ヲ得タリ」とあり、源内は宝暦10年（1760年）に紀伊に行った時に胆八樹を手にいれ、その元でもある大木の形状を確認し、葉が落ちるのを観察したのだ。これは第五回東都薬品会の2年前の話である。

そして源内らは蜜産の実とこの深専寺で得た実を比較した。その結果「蜜産ハ大二、和産ハ小ナリトイヘドモ全ク同物ナリ」という判定を下す。そしてある人が橄欖の一種ではないかという説を出したらしいのだが、それは「甚非ナリ」と一蹴している。実体験から得た知が薬品会に求められているのである。その経験上の知と実際のモノでもって世界が解説されていく中で従来の知が更に進化していく過程こそ源内らが本草学を学ぶにおいて求めた姿勢であった。

そして源内は宝暦12年3月に江戸にやってきた紅毛外療のポルストルマンに直接会い、胆八樹の実物を見てもらった。小川悦之進が通訳を務め、「蜜人ハ実ヲ酢ニ漬テ是ヲ食フ、味酸甘ナリ。又和俗統随子ヲポルトガルト称スルハ大ナル誤ナリ」という知識が得られたことが『物類品隲』に記されている。このような経験が薬品会には反映され、知識は開放されていった。紀伊でのモノと経験が『本草綱目』という中国古典の解説に補完されるだけでなく、言葉であった「胆八樹」の概念を実体化させている。そしてモノを通じて西洋のモノと環境、そして人間の風俗を源内らは垣間見るに至るのである。モノは中国やいわゆる蜜国などの外国への扉でもあった。源内が薬品会以前に既に紀伊で実地調査を行い、東都でポルストルマンから知識を得ていることから、中国古典も合わさって薬品会は外国の言葉が飛び交い、風俗が語られ、日本産のモノの隣に中国や朝鮮果てはオランダやポルトガルといった外国産のモノが展示される多国籍の空間となっていく。実際の経験こそ薬品会で貴

ばれる知識の源泉であり、『物類品隲』が求めた記述であった。

『物類品隲』は決してモノの知を単独で記述しようとはしていない。『物類品隲』では無数のモノ・人・自然が中国古典の知識だけではなく経験によって形成された認識の枠組みに嵌め込まれていくことによって、各々の個性や独自性が互いの関係と共に明らかにされていく。『物類品隲』はモノとそれに関わった人間たちの経験を中心に置きながら、日本を隙間なく覆いながら海を越えて世界へと至る関係の網を編集しているのである。

3.5 スランガステインを巡る人々

源内の紀伊行きやボルストマンとの会談など薬品会以前の経験が『物類品隲』には数多く解説されている。その一つとして龍骨の解説がある。

薬品会には讃岐小豆嶋の龍齒と龍角が竜骨として出品されている。そして龍角には蛮国産のものもある。これはスランガステインといい、紅毛人が稀に持ってくるものだとして解説されている。福山舜調によれば『薬性纂要』に載っている吸毒薬がスランガステインだそうだ。

そして藍水が長崎に遊学した際（宝暦8年）に「吉雄氏栖林氏」にスランガステインと龍角の関係を質問したことが書かれている。吉雄氏（幸左右衛門）や栖林氏（十右衛門）は既に『物類品隲』に登場している通詞である。特に幸左右衛門は自ら光明塩を出品している出品者だ。『物類品隲』には数多くの紅毛人が長崎に持ってきたという蛮産のモノが出品されており、また巻之五には長崎産の香鼠が解説されているが、これらの出品が叶い、数多くの西洋の知識が薬品会で開放され、『物類品隲』に解説されるに至ったのは藍水の長崎遊学（もしくはそれ以前に行われた源内の長崎遊学）がきっかけとなって生まれた人脈があったが故だろう。薬品会以前から培われた人と人との関係が薬品会を（特に第五回東都薬品会を）盛会へと導いた。つまり、今までの薬品会よりも多くの出品があり、大勢の参加者らの知識や経験が活発に議論された。そして通詞たちがモノを出品し、多くの知識を藍水に提供していることから、通詞達の間にも既に外国という未知の国を実際のモノや人間の実体験、生活などから知りたいという意欲があり、既にオランダ人相手に実践されていたことが『物類品隲』からはうかがえる。

そして紅毛人の外科医であるパウルが宝暦10年に江戸に来た際、藍水も龍角についてパウルに質問したことが書かれている。源内だけではなく藍水も直接、モノの知識を得るためにオランダ人に会いに行っていたのである。その結果、龍角はスランガステインである事が証明され、オランダ人たちは「本邦二産スルコトヲ聞テ大ニ驚」いた。オランダ人の反応にまで解説は及んでいる。

『物類品隲』は当時の日本や海外で実際に生活し、源内らと言葉を交わし、モノを介して交流していた人間達の生活だけではなく感情まで記述されている。この中には薬品会だけではなく、薬品会を中心にして集った人々の息吹がつまっている。それが他の本草学書との違いの一つだ。『物類品隲』からは18世紀中葉の本草学者たちにモノを中心にした交流が如何なる影響を与えていたのかが「人間」の声と情熱をもって伝えられる。

そして「吉雄氏訳ヲ伝フ、証トスベシ」とある。「証トスベシ」とは非常に強い口調である。金剛石の解説でも考察したが、『物類品隲』では多くの中国や日本の古典を引用し、参考にしてモノの実体を解明し、理解した様子が記述されている。薬品会では言葉はモノを記述するだけではなく認識する「目」となっているが、薬品会に関わる人々はモノを古典の枠の中でだけで認識し、確認しようとはしていない。また古典の記述を全て鵜呑みにし、自分たちのモノへの解説に説得力をつけるために古典を利用しているわけでもない。

『物類品隲』には「非ナリ」や「誤ナリ」、果ては「妄説ナリ」「削去ナリ」という言葉が頻出する。源内らは薬品会を開催するにあたり、参加を求める引札を全国に配っているが、その中で学者たちが「耳ヲ貴ビ目ヲ賤」していると書いていた。源内らは耳学問に惑わされることもなければ古典の権威を借りることもなく、実際のモノからの情報と実体験に基づいた知識を尊重し、信頼しようとしているのだ。

既にいくつか源内らの実地調査の様子は見てきたが、この龍骨でも「漁人網中ニ得タリト云」と聞き取り調査もしていたことが分かり、また「之舐舌ニ着之ヲ用其ノ効驗本草ノ主治ト合ス。是真物疑ベキナシ」と実際に舐めることでモノの真偽の判定を下している。

実証に基づく批評精神は『文会録』でも現れており、やや時代は遡るが『本

草綱目』を批判して『大和本草』を著した貝原益軒の時代からも伝わるものであり『物類品隲』の際立った特徴ではない。しかしその益軒も『物類品隲』では批評され、また龍骨の項目では大先輩でもある松岡恕庵に対し「松岡先生、是ニ雷同シテ真ナルモノ絶テ稀ナリト云ヨリ、声ニ吠ルノ徒、管見ヲ以テ弁説ヲナス。皆夏虫氷ノ論知ズ、拳テ論ズルニ足ズ」と中国古典に雷同し、狭い見識の弁説であるためにここで引用する価値もないと厳しい批判を与える。ここでは感情の昂ぶりすら感じさせる。これを書いたのは源内だろうが藍水や他の編者たちによって削除されずに済んだところを見るに、感情の昂ぶりすら実証に値する経験さえあれば認められるものであったことが伺える。

「吉雄氏訳ヲ伝フ、証トスベシ」という記述の他にも「○○曰」など『物類品隲』では実際に藍水や源内らと議論を交わした人々の実名が非常に多く使用され、発言元が参照できるようになっている。多くの人間の「実践」と「実証」によって得られた見解と知識が伝搬し、そこから新たな事実や真実が明確になっていく場こそ薬品会であり、その昂ぶる感情や情熱を世間に伝える本こそ『物類品隲』であった。そこでは実体験に基づく実証により古典の真偽が詰問され、自らに近しい日本の本草学の雄の経験や知識までが批評される。そして実証によって新たな知が生み出されていく様子が編集されている。

3.6 芒硝から繋がる歴史

第五回東都薬品会を開催するにあたり全国に回した引札の一文には「方ニ今本草学盛ニ世ニ行ルト雖モ深ク好ム者蓋シ少シ。故ニ諸国産物未ダ盡ク出テズ」とある。幕府の国家政策や園芸趣味に伴い隆盛を極め始めていた本草学であったが、藍水らのようなプロの学者の目から見れば、未知のモノを追いかめると同時に自然を窮め、学問を追究しようとする人材は少なかった。藍水一門は自らの好奇心や知識欲を満足させるに留まらず、薬品会の開催によって本草学に興味を持つ人間を増やそうとする思惑がある。そして薬品会が学問全体のレベルを向上させる可能性を考え、期待している。ここから藍水一門が薬品会を開催するに至った動機の一つとして本草学の活性化と探求心溢れる学者の育成が挙げられる。「薬品会」という場が参加者らの好奇心や知識欲を高めるきっかけとなり、本草学という学問全体の転換点となることを藍

水一門は求めているのだ。この目的に関わる具体的なエピソードが『物類品隲』の芒硝の項目で解説されている。

まず源内が「予辛巳ノ秋、家僕ニ命シテ薬ヲ伊豆国ニ採シム。留ルコト三月余、産物ヲ送致スモノ数十度」と念に念を入れ、時間をかけて実地調査と実物による親試実験を繰り返していたことが明らかになる。

源内は藍水を通じて幕府に芒硝の製作を報告し、ついに官命によって源内自ら伊豆へ至ることになる。そして郡官の「江川君」⁶⁾の助けを借りながら数日で芒硝を「製成」し、これを藍水が幕府に献上した。源内は自分の業績を世間に誇りたかったと考えることもできる。しかし『物類品隲』には源内の経験だけではなく藍水や淳庵、そして善光寺から錦黄耆を得たという青山仲菴の経験も記述されている。その他にも阿部将翁による甘草の採取など、源内とも薬品会とも直接の関係はない学者達の活躍や実績も記述されている。そして「官ニ献ズ」「台命アリテ」「官園ニ植」などモノと政治、そして幕府と本草学、ひいては本草学者と関係の歴史を示唆させる表現が『物類品隲』には頻出するのである。またこの芒硝の項目では源内が製作した芒硝を藍水を通じて幕府に献上した話題の後に、何故源内が伊豆に興味を持ったのかが明かされるのである。

源内が芒硝を手に入れるきっかけとなった出来事は、伊豆に住む鎮惣七が源内を訪ねてきたことだ。惣七は源内とは面識がなく、また名のある本草家でもない。また武士身分でもない。農夫なのである。しかし惣七は「其ノ人能ク本草ヲ言」と源内が思うほど非常に博識な人物だった。不思議に思った源内はどこで教えを受けたのか聞いた。惣七は「本邑山海之間ニ崎嶇シテ。吾済野人豈ニ能ク書ヲ読而学ヲ為知也。往歳誠所並河先生有三島駅ニ寓ス。経ヲ講スル之暇又本草ヲ授ク」と山海の間に崎嶇したる僻地では書を読み学問を修めることを知らなかったが、並河先生に寓し経学を講じ本草学を授けられたと答える。そして「農夫・農人多ク鳥獸草木之名状臭味ヲ識テ以テ予セ救荒之用ニ不可不」と農夫たるものの本草を学び、鳥獸草木の名状や臭味等を識別しておくことは荒年の備えになると惣七は語る。

惣七がいう「並河先生」とは並河誠所のことだ。並河は伊藤仁斎に師事した儒学者でありながら地誌にも興味を持ち、『日本輿地通志畿内部』を発刊した地理学者でもある。この『日本輿地通志畿内部』は日本全国を網羅するこ

とが目標であったが、実現したのは畿内だけであった。しかし『日本輿地通志畿内部』は古文書や伝承などの史資料を実際に集めて回り、六年にも及ぶ実地調査の末に完成した地誌である。そして江戸時代最初の幕撰地誌と見なされ、後の地誌編纂事業に多くの影響を与えた。非常に画期的な活動を行い、歴史的な意義の大きい業績を残した地理学者は本草の知識にも秀でており、それを伊豆の農夫らに伝えていたことが惣七の証言から分かる。それは結果として荒年の備えにもなり、農夫らの生活の質の向上に大きく貢献するに至った。

薬品会以前に農村部にまで本草学は既に浸透し、それは生活に多大な影響を与えていたことが分かる記述だ。既に青木昆陽や建部清庵の働きによって救荒書はいくつか出版されており、救荒の側面から本草学を究めていこうとする動きは起こっていた。しかしその影響は幕府の高官や医官、藍水一門のような知識人そして民間の薬種商や植木屋などの本草学に関わる生業につく商人のみならず、農村部のかつては書を読むことすらなかった「農夫・農人」にまで及んでいるのである。実地調査による成果を残した並河の下で、「生活」という実経験の中で農夫らは本草学を学び続けていた。彼らは源内らが薬品会と『物類品隲』を通じて啓蒙、普及させようとしている「徒ニ耳ヲ貴テ目ヲ賤ンス」⁷⁾ ことのない実践に基づく本草学を既に「生活」という実体験の中で学び続けているのである。その知識は荒年を乗り切るほど実用的なものであった。そして彼らの本草学は生活の知恵を増やし、生活の質を向上させるだけに留まらない。惣七のように当時すでに一定の知名度を誇っていた藍水の弟子である源内をわざわざ訪ねてくる人間も生まれたのである。

惣七の本草学は伊豆という生活の共同体に留まるものではなかった。知は外部に開かれたものとなり、都市や地方を伝搬していく。知を実生活に生かしながらも実利に拘ることなく「本草ヲ好ム」惣七の登場は、源内らに芒硝に代表されるような「珍品・奇物」の発見を促しただけではない。実見に基づく本草学を実践しながら実用し、そして知を派生させていく行動力を伴う学問への姿勢は、源内らが薬品会によって普及させようとしていた本草学の姿である。惣七は民間のそれも農村から登場した新しい人間であり、源内らが薬品会でもたらしたかった本草学の可能性を体現（実証）してみせた人材でもあったといえよう。

その感動を『物類品隲』では「然雖並河先生無ハ者鎮氏ハ一農夫ノミ。斯レ焉ソスヲ取ン。嗟乎君子人ヲ教其ノ及フ所ノ者遠カナ」と表現している。並河がいなければ惣七は農夫のままである。これ取りも直さず並河先生の教えに基くところと、その賜を源内は深く喜んでいる。君子の教えが如何に遠くの人間へと伝搬し、その恩恵がどれだけ貴いものかを『物類品隲』は感謝と感動を込めて語る。

これは源内の経験であり、そして並河から至る惣七の知の体験でもある。本草学という学問が秘めた可能性と広範に渡って繋がれていく知と人の関係を『物類品隲』は示唆する。本草学の継承と知の伝搬は、嘗ては書も読むことのなかった農夫の実生活のみならず知的生活までも変え、それは後に公命を賜うほど有益なモノの発見へと繋がるのである。

知の伝搬とは即ち知の開放である。知とは一人の君子や一つの学派が独占するものではなく、外部へと開放されていくものとなっていく。それは惣七のように人間の未来を変えるものともなり、ひいては共同体のような一つの世界を変えるものともなりうる。開放によって起こる知の刺激はその連続によって変化を起こすことを『物類品隲』は記述する。

序文でも藍水が「方ニ今本草学盛ニ世ニ行ルト雖モ深ク好ム者蓋シ少シ」と書き、薬品会とは本草学全体のレベルの向上と、本草学を学ぼうとする人間の育成を目指す場としても考えられていた可能性があった。惣七の存在は本草学によって生まれた人間の関係の中で、人間自身にも新たな変化が起こることを源内らに証明するものであった。並河から惣七に伝えられた知は更に源内らに伝えられ、芒硝の製作を実現させた。知の普及は本草学に新たな展開をもたらす刺激となり、それは世界の変化にまで至る可能性を秘めていた。源内らにとって知とはただ蓄えるものではなく、それによって世間を、ひいては世界を興すものでもあった。

この惣七は薬品会では出品物の中継地点である諸国産物取次所の一つに指定されている⁸⁾。産物取次所は薬品会以前から構築された人間関係によって成立しているが、それは名高い学者に限られてはいなかった。

源内らは薬品会の開催以前から人間の活動と関係の構築によって知が更新されていく様子を目の当たりにしており、それを更に広範囲に普及させ、学問

と人の可能性を拡大させようとしていた。実際に第五回薬品会には後に源内と火浣布を制作する中島利兵衛や、淳庵と『Anatomische Tabellen』の翻訳に挑み『解体新書』を出版することになる杉田玄白の参加が確認できる。また『解体新書』には幸左右衛門が序文を寄稿している。

薬品会とは確かな実力を備えた有益な人材を発掘し、参加者らが自らの学究人生に新たな可能性をもたらす相手を見つけだす場となっていた可能性が高い。薬品会とは本草学に興味がありながらそれまでは無名であった人物が世に出る「きっかけ」を生む場ともなり、後々まで続く関係を繋ぐ場でもある。そしてこれまで知られてこなかった新たな知を持った人物の存在をモノの解説と共に『物類品隲』は示す。『物類品隲』はモノだけでなく人間をも表現し、その価値を発見しているのである。

『物類品隲』に記述された経験と体験の主は本草学者に限らない。墨の項目では推古天皇の時代に高麗から献上されたのがきっかけで「日本ニテ墨ヲ作ル」ようになったと益軒の説を引用して解説する。そして南都の墨工である古梅園の「心ヲ用テ甚ダ精巧ヲ尽」した墨が薬品会に客品として出品されている。薬品会の出品物は自然物だけではなく名のある工による製品も出品されていた。また嘗ての古梅園の主である松井元泰が長崎に遊学し、家製の松烟煤を漢土へ帰る商人に渡したという元泰の墨を巡る経験が記述されている。この墨の項目では産地や形状、製造のみならず推古天皇から続く歴史が語られた末に江戸を生きた元泰の経験が記述される。墨の歴史の中に元泰は記述され、その経験は歴史の一部となっている。人間の経験は歴史となり、歴史を覗き読み解くツールとしてモノがあるのだ。

『物類品隲』には「推古天皇」のほかに「天武天皇」「聖武天皇」「『日本書紀』ニ出タリ」など日本の古代の歴史がモノと共に語られることがある。これはこれまでの薬品会の目録解説書にはない記述である。しかし既に『和歌食物本草』など日本の古典や歴史に本草学を仮託させて広範に知識を普及させようとする手段は存在していた。江戸の本草学とは江戸以前から続く文化や歴史をも見つめるものでもある。

『物類品隲』にはモノの形状や製造に関する知識と共に、自然のメカニズムや人間の民俗、そして源内を中心とした当時の人々の実際の経験が記述されて

いる。そしてそれは歴史の一部となっていく。源内らが『物類品隲』で記述しようとするのは決してモノの真実ではなく、過去の知の批評でもない。各々のモノの項目で記述されるのはモノと自然の関係であり、民俗や方言といった人間との関係である。そして薬品会に関わる人間の体験がいかに広範囲に波及し、新たな知が歴史の一部となり時代を興していくのかという実際の「出来事」が記述されているのである。

4. おわりに

薬品会は、古典を朗読するだけではなく実際のモノを観察することで知を得ようとする本草学の気運に、輸入に頼りがちな日本の社会情勢への危惧が反映されることによって活性化した。そしてこれまで知られてこなかったモノを発見し、知識を得るだけではなく、有益な人材を発掘する場ともなっていたことが『物類品隲』の記述からは分かる。

『物類品隲』にさがけて出版された『文会録』や『楮鞭余録』でもモノの産地の環境や人間の生活にまで記述は及んでいた。『物類品隲』はそこに更に具体的な人名などの固有名詞を加えることによって記述をより明確にし、またモノに関わる人間たちの関係と発生した出来事に至るまで詳細に記述している。『物類品隲』の独自性は非常に多くの人物が登場し、その活動が活写されることによって生まれる現実感と臨場感である。これは他の本草学書には無い特徴である。

薬品会の話題の中心点は名称や薬効、形状や味覚、民俗や歴史など、視点や目的と共に移動しながら増殖していく。中心が定められないがゆえに巨大な認識と実践の運動が薬品会では起こっていた。それは医師や薬種商のような旧来の本草学をフィールドとする人物もいれば、栽培技術などのメカニクな方面に関心を持つ人物もあり、オランダ人や異国といった新規の情報源に目を向ける人物も同時に存在する。この一貫性が無く、新旧が互いに乖離しそうになりながらも互いに結びつき合い、剥がれる事無く関係づけあいながら知が更新され、普及していく様子を『物類品隲』は記述によって編集する。中国や日本の古典を参照しながらも実践を伴うことでその一歩先に踏み出し、

当代の実情が反映されるなかで歴史と知が更新され、江戸独自のものへと本草学の知が昇華されていく「様子」を語る本こそ『物類品隲』である。

『物類品隲』では従来の知識と新しい知見が交錯する様子と、モノ・人・自然・国といった多くの要素が互いに連動しながら複雑な関係を築き上げていく「出来事」の様子が、当時を実際に生きる名前を持った人々の知や経験と共に記述されている。確かにモノは「水部」や「木部」のように分類され、単独で記述されている。しかしその中では名称や民俗、国や政治、人間同士の繋がりがなど多くの諸要素が国も時代も越えて編集されている。また薔薇露の部分でみられたようにキヨルコやサルアルモニヤアカの解説へとページをめくらせるような仕掛けも施されている。そして長崎の通詞とオランダ人の交流や、元は農夫だった惣七と源内が本草学を通じて関係しあうことで芒硝の製作が実現した現実など、各々の解説は単独で存在すると同時に多くの現象へと繋がり続ける編集が施されているのである。

源内らが『物類品隲』によって世間に伝えようとしたのは、薬品会に集まった薔薇露や芒硝、墨などの「モノ」から浮かび上がってくる世界の諸要素の関係である。その「関係」の内部には薬品会の開催以前から培われてきた本草学の学び手たちの経験と知の繋がりも含まれている。『物類品隲』には人間とモノと世界の間で繰り広げられる「出来事」が編集されているのである。それは本草学が培ってきた経験と知の歴史の編集であるともいえる。

『物類品隲』は薬品会の解説目録書でありながら、本草学の世界で何が起きているのかを記述の手段によって編集するものである。薬品会に関わる人間の体験がいかに広範囲に波及し、新たな知が歴史の一部となり時代を興していくのかという実際の「出来事」が具体的な人名と共に記述されているのである。

よって『物類品隲』は江戸時代の本草学の歴史が培った広い底辺の上に築き上げられており、「出来事」の活写によって本草学の知の波及と展開を一望する本草学書であるといえる。

註

- 1) 西村三郎『文明のなかの博物学 西欧と日本①』1999年 紀伊國屋書店 p.133
- 2) 『平賀源内全集』入田整三編、平賀源内先生顕彰会、1932年 p.1501
- 3) 本稿での『物類品隲』の引用は全て、1972年に八坂書房から翻刻され出版された『物類品隲』の記述である。一次資料は宝暦13年に発行された『物類品隲』であり、原本は国立国会図書館で確認できる。平賀源内『物類品隲』杉本つとむ解説、八坂書房、一九七二年
- 4) 平賀源内『物類品隲』杉本つとむ解説 1972年 八坂書房 p.167
- 5) 松田泰代「史料から見た『物類品隲』出版経緯に関する一考察」『書物・出版と社会変容』5号 2008年 p.63-78
- 6) 葦山代官の江川太郎左衛門のことである。
- 7) 源内が第五回東都薬品会を開催するにあたり全国に回した引札の一文である。平賀源内『平賀源内全集』入田整三編、平賀源内先生顕彰会、1932年 p.1501
- 8) 取次所とは源内らが第五回東都薬品会を開催するにおいて地方からの出品物を仲介するために設けた場所のことである。この取次所の一つとして惣七の名前が引札に挙げられている。平賀源内『平賀源内全集』入田整三編、平賀源内先生顕彰会、1932年 p.1502

参考文献

- 磯野直秀「薬品会・物産会年表（増訂版）」『慶應義塾大学日吉紀要・自然科学』29号、2001年 p.55-65
- 上野益三『博物学者列伝』八坂書房、1991年
- 貝原益軒『大和本草』白井光太郎考証、有明書房、1992年
- 片桐一男『阿蘭陀通詞の研究』吉川弘文館、1985年
- 木村陽二郎『江戸期のナチュラリスト』朝日新聞社、1988年
- 栗野麻子「平賀源内と東都薬品会—本草学のネットワーク」『史泉』112号、2010年、p.10-19
- 城福勇『平賀源内の研究』創元社、1976年
- 杉田玄白『蘭学事始』片桐一男翻訳、講談社、2000年
- 杉本つとむ『江戸の博物学者たち』講談社、2006年
- 戸田旭山「文会録」上野益三解説『博物学短編集下』恒和出版、1982年、p.8-68
- 豊田養慶「緒鞭余録」上野益三解説『博物学短篇集下』恒和出版、1982年、p.72-132
- 並河誠所「五畿内志上」正宗敦夫編集『覆刻日本古典全集』現代思潮新社、1978年
- 並河誠所「五畿内志下」正宗敦夫編集『覆刻日本古典全集』現代思潮新社、1978年
- 西村三郎『文明の中の博物学上』紀伊国屋書店、1999年
- 西村三郎『文明の中の博物学下』紀伊国屋書店、1999年
- 平野満「薬品会・物産会の基礎的研究—富山藩の盆栽月次品評会「日新会」と富山藩薬品会—補論。『奇草小図』の印刷—金属活字』『明治大学人文科学研究所紀要』48号、2001年、p.413-428
- 平賀源内『物類品隲』杉本つとむ解説、八坂書房、1972年
- 平賀源内『平賀源内全集』入田整三編、平賀源内先生顕彰会、1932年
- 松田泰代「史料から見た『物類品隲』出版経緯に関する一考察」『書物・出版と社会変容』5号 2008年 p.63-78
- 山田慶兒編『東アジアの本草と博物学の世界上』思文閣出版、1995年、p.138-173
- 吉見俊哉『博覧会の政治学 まなざしの近代』講談社、2010年

<ABSTRACT>

Wisdom of *Butsuruihinshitsu* —This is a book of herbalism which edited the occurrence—

KAWASAKI Eiko

Honzougaku, the study of medical herbs, is a knowledge which recognizes and describes all natural things as a medicine. This study was born in China and introduced to Japan in the Edo period. In the 18th century, Japanese *honzogaku* became a natural history, which is the study of organisms including plants or animals in their environment. In the process of this development, *yakuhine* began to hold. It was a gathering of scholars and they suggested the meeting to discuss and examine about natural material collected from all over the country. Then *butsuruihinshitsu* was published in 1763. It was a handbook which made many comments about articles on exhibition after the meeting. The main purpose of this paper is to argue and examine the actual condition of *butsuruihinshitsu*.

Writers had kept record of not only the effect but also shape of each material. It implies that participants of *yakuhine* were observing articles on exhibition. They tried to get wisdom from the natural materials instead of learning text which were described in Chinese or Japanese classics.

Moreover, they had kept record of dialect, folkways and history which were related to natural material or they also recorded of the story of personal experiences which led the natural material. They tried to describe the relationship between many elements, such as man, nature, a country, or history. The wisdom which was created at *yakuhine* updated classic knowledge and influenced over various area of disciplines. And they had written a description of human relations which had been involving with *Honzougaku*. They had kept record of rare occurrences of the world in

buturuihinshitsu.

Butsuruihinshitsu was a book which had written human relations which cultivated and created new intelligence in many fields.